

監修の序

このたび、『症例検討で身につける 脳卒中の理学療法』を発売することとなりました。これは本シリーズの初刊である『内部障害の症例検討』に続く第2弾となります。

本シリーズが産まれたきっかけは、『内部障害の症例検討』の序文でも記しましたが、第51回日本理学療法学会大会において日本呼吸理学療法学会学術集会の企画として実施した「若手会員のための役立つ症例検討会」でした。これは呼吸障害を有する症例に対し、その分野の専門理学療法士が症例を提示し、どのような評価を行い、その結果をどう解釈して理学療法プログラムを立案して実施し、その結果、どのような変化が得られたかを経験的側面からだけでなく、最新のエビデンスをもとに解説するといった企画でした。この症例検討会の会場は満員となり、実際の内容も若手の理学療法士だけでなく、多くの臨床家にとってたいへん参考となる有意義なものでした。そしてこれを書籍化したものが本シリーズです。

理学療法の臨床の場面においては、担当する症例をどのように評価・治療することが患者のために最も有効かを日々悩むことと思います。特に卒後間もない臨床経験の少ない若手理学療法士や、これまであまり担当したことがない疾患の患者を治療する場合、自分が行っていることに不安を感じることは多いでしょう。そこで本シリーズでは、各分野のエキスパート達は何を考えて、どのような治療プログラムを立案するのか、その理論的背景は何かをわかりやすく解説することを目的として企画し、今回は理学療法士が最も治療を担当する機会が多いと思われる脳卒中（脳血管障害）患者に焦点を当て、この分野の第一線で活躍されておられる先生方に執筆していただきました。脳卒中のエキスパートの先生方に執筆いただくにあたり、日本神経理学療法学会の運営幹事である諸橋 勇先生に編集をお願いし、執筆者の選定、執筆内容のチェック、そして「ここがエキスパート」として、効率的な学びのため、各症例報告のなかでエキスパートPTならではの対応にコメントを書き加えていただくことで、本書はたいへん充実した内容となりました。

歴史的に脳卒中患者に対する理学療法は、さまざまな考え方や治療テクニックなどがあり、病院によって、あるいは担当セラピストによって考え方の違いがあるのも事実です。しかし本書では、ある特定の治療コンセプトや技術に特化したものではなく、「脳卒中治療ガイドライン」や、これまでの研究成果にもとづくエビデンスに即した標準的な考え方による症例への評価、および治療介入を重視したものであることが大きな特徴です。

本書が脳卒中患者の治療を担当する多くの理学療法士達の臨床における指南書となれば幸いです。

2019年7月

シリーズ監修
玉木 彰